

かわらばん

第9号 2016年6月3日



小さな勇気 大きな結果

一票一票を積み上げて政治を変える！

なぜ選挙に行かないの？

1. 「適当な候補者も政党もなかったから」(26.4%)
 2. 「選挙にあまり関心がなかったから」(19%) 「政党の政策や候補者の人物像など、違いがよく分からなかったから」(19%)
 3. 「私一人が投票してもしなくても同じだから」(14.6%)
 4. 「選挙によって政治はよくなるな」と思ったから」(14.1%)
- うーん、その気持ち、よくわかる。受け皿がない、違いがない、変わらない、良くならない。
- だけど、このヨンナイ、天を仰いでため息ついていても、どうにもナンナイのよね。
- やっぱり、一票を持っている私たちが変えなきゃ。受け皿(野党共闘)は市民がつくった。違いはある。変えるのは私たちの役目。「無関心」な人にも、ちよつと勇気を出して話しかけて！
- (数字は、明るい選挙推進協会「第三三回参議院銀通選挙全国意識調査」より)



K (一票で変える女たちの会)

わたしの担当はSさんと言って三十代後半の女性。もう七年ほどのつきあいです。

彼女は活字を見ると頭が痛くなるそうで、「だからマンガすら読んだことがないんです」とか。

お互いフィギュアスケートのファンなのでいつもその話で盛り上がるのですが、先週、いつものようにおしゃべりをしながら、そういうえば、と、話を政治に向けてみました。

(以下、その時の会話を実況中継ふうに)。

「ねえ、Sさん、わたしが政治的な活動してるって話しましたっけ？」

「いえ、聞いていませんけど」

「あつそう。わたしね、政治には関わったことがなかったんだけど、この国が戦争をする国になるかもし

れないと知ってびっくりして活動を始めたの」

「戦争をする？ なんのことですか？」

「あのね、安保法制ってあるでしょ、それに反対してるの」

「アンポ……なんですか？」

「安保法制って知らない？」

「ええ、知りません。新聞読まないし、テレビのニュースも見ませんから。見るのはドラマとバラエティーくらいかな」

「憲法九条ってあるでしょ。日本は憲法九条で永遠に戦争をしないって言っているの。ところが、今の安倍政権は憲法九条を変えて戦争ができる国にしようとしているのよ」

「やばっ！ やばいですよ、それ。戦争なんか、とんでもない。でも憲法九条ってなんですか？」

(ここで一瞬たじろぐが、気を取り直す)

「憲法九条っていうのはね、日本は今後絶対に戦争しないと誓った、とても大事なもののなの。でもね、外国が攻めてきた場合はもちろん戦うことができるのよ。戦争しないって言ったからって、やられっぱなしなんてばかなことにはもちろんならな

い。だから心配しないで」

「あのう、その憲法についていつできたんですか？」

「この前の戦争が終わったすぐ後よ。日本の自衛隊って、災害の時の救助に行ったり、外国で道路補修を手伝ったりしてるでしょ」

「えー、そうですね。災害の時はいつも大活躍」

「日本の自衛隊は今までひとりの戦死者も出してないし、人も殺してないの。そりゃそうでしょ、だって憲法九条で戦争をしないって決めているんだから。」

でも自民党が考えているようなやりかたで憲法が改正されて、日本が戦争のできる国になってしまったら、自衛隊からだって戦死者も出るし、他の国の人たちを殺すことだってあるのよ」

「やばっ、やばいじゃないですか。全然知らなかった」

（ここでSさんに恋人がいて、結婚したいといっていたことを思い出す）
「それからね、いまの憲法では、結婚は両性の合意のみ、つまり結婚したいふたりが決心すれば結婚できるのに、自民党が考えている憲法の案には、ふたりの意見だけできめれば

良いとは書いてないの」

「えっ。やばっ。それってやばいですよね」

「そうよ、やばいもやばい、大やばなの。それはそうと、Sさん、選挙に行った事ある？」

「いいえ（ちよっと恥ずかしそうに）生まれしてからいつぺんも」

（ここで以前甘利氏の不祥事が騒がれていた時、呆れるわよね、とわたしと言ったら、いいえ全然。政治家ってそういうことを平気でする人がなるもんだって思ってますから、と言っていたのを思い出す）

「選挙に行かないのは、行っちゃってしょうがない、どうせ変わらないと思ってるからでしょ？」

「そうです。だって政治家に誠実な人がいるわけじゃないんですか」

「まあね、行っちゃって仕方がないっていう気持ちにはわかるの。選挙には行っていたけど、そういう気持ち、わたしにもずっとあったから……。でもね、今こんなに怖い世の中になっちゃったんだから、そんなこと言っちゃいけないの。行かないと大変なことになってしまうかもしれないのよ。平和な時代に生まれて、このまま平和な世の中のまま死ん

でいけるとばかり思っていた。ところはどう？ この年になってこんな

恐ろしいことになってしまった。だから、慌ててるってわけ」

「そういえば、ついこの間テレビのバラエティに出てきた政治家の人を見ました。石なんとかって言う人でした」

「石破さん？」

「そうそう、その人です。話が面白くて、なんかとってもいい人っぽかったですよ」

「そこなのよ、政治家は若い人に人気のあるバラエティには喜んで出るの。そして、いい人だと思われるのが目的なの。でもあの人も日本を戦争のできる国にしようと考えてるのよ」

「そうかあ……。いい人っぽかったけど、バラエティじゃ、政治の考えなんかわからないですよものね」

「今ね、安倍政権がすごく力を持つてるでしょ、でも選挙の時に自民党に投票した人って国民の二割ぐらいしかいないの。それなのにどうしてあんなに力を持つてるのか。それはね、今の政権をいいとおもっているのに選挙に行かない人たちがいるからなの。Sさんもそうでしょ。だから戦争に反対する人たちがみんな選挙に行けば、憲法を変えないようにさせることができるってわけ」

「そうなんですか。じゃあ今度の選挙には行きます。いつですか？」

「七月よ。まだ日は決まっていけないけど。日曜日は忙しいでしょ、そういう人は前もって投票しておけるの」

「あ……。そういえば、その話は前に聞いたことがあります」

「ですからね、当日じゃなくてもいいの。ぜひ投票に行ってくださいね」

「わかりました。あの、いっそ、選挙に行かない人むけに罰則を作れば良いんじゃないですか（と言っちゃってから、照れくさそうに）行っちゃったことがないくせにこんなこと言うのも、なんですよけど」

「そうね。そういう考え方もあると思う。でも安倍さんはやらないわよ。投票率があがると損するから」

（ここでSさんが大変な酒好きで、しじゅう友達と飲んでいっていることを思い出す。実家が酒屋とか）

「飲み会でお友達にもこの話をしてぜひ投票に行こうって誘ってね」

「わかりました。そうします。いやあ、やばいことになってたんですね



え……」

（レジで支払いをするとき、ちょうどバッグにあった表現の自由についての枝監督の講演会のチラシを渡す）

「下のほうにわたしたちの会のホームページアドレスが書いてあるからぜひ開いてみてください。このチラシ、五枚あるから、飲み会の時に友達に配ってね」

難しい話は一切苦手というSさんなので今まであまりこんな話をしたことがなかったけれど、話つて、してみるもんだなあと思つた次第です。

たった一人の選挙運動

道下匡子

札幌の自分の家で暮らす母はこの六月一日で満一〇七歳になります。九年前に最初は左、つぎに右の大腿骨頸骨（お年寄りが折るのは大体この骨）を折り、二度の手術、その都度めげずに励んだりハビリのお陰で、今でも家の中は歩行器で動きまわることができます。私は月に一

度、母を訪れ、東京にいる時は日々二度、朝夕の決まった時間に母と電話で話します。以前はもつと楽しい話題が多かったのですが、第二次「アベ独裁政権」発足後は、母も私もつねに「怒り心頭に発する」の境地にあり、「とにかく七月の選挙で与党を落とさなければ、日本は軍国主義に逆戻り！怒れる国民はゼツタイに棄権せずに、与党以外に投票し、戦争法案を廃止しなければ」と、一念発起。以来、私は機あらば逃さず、たった一人の選挙運動キャンペーンを続けている。

母静恵は一九四六年に日本女性が選挙権を得てから、どんな選挙も棄権したことがない。「前の戦争の時は、選挙権がなかったけれど、今は女たちが本気にさえなれば、戦争を止められるんだよ、一票の力で」と、母は一語一語力を込めている。実際、樺太のあの惨劇（拙書『ダスビダーニヤ、わが樺太』はその記録）を生き延びることができたのは奇蹟に近く、真岡（現ホルムスク）の隣近所で生き延びたのは、私たち一家と真岡中学の校長だけ。他はみなソ連兵に撃たれるか、もしくは青酸カリ、カミソリ、日本刀で自ら凄惨な最期

を遂げた。私の人生の最初の記憶は、父と母、それに一九歳の医学生長の男から三歳の私まで七人の子供達が防空壕の中で息を殺し、直視した死の恐怖。

無関心派のところに、火を付ける

このキャンペーンの目的は、ずばり今回の参院選の投票率を上げること。投票率40〜50%では、到底自民の戦争推進者共に勝つことはできません。いま日本が直面する最重大事項——戦争法を廃止し、日本国憲法を魔の手から守る——を全うするためは、有権者のほぼ半数を占める無党派、無関心派のところに、どうかして火を付けなければなりません。他にも原発は止める、辺野古に基地をつくらせない、非正規社員が労働者全体のほぼ40%を占め、その70%は女性という深刻な労働状況も、切羽詰まった問題です。

しかし多くの一般的日本人にとって、私たちの命を、生活を守ってくれる最も重要な憲法の問題は、賃金や消費税の問題に比べるとあまりにも抽象的で、憲法を破壊することに政治生命をかけている現首相の恐ろ

しさがわかりません。一般的日本人のメンタリティーを熟知している魔の手は——メディアを通して国民のこころを自由自在に操る術に長けた専門家を、まわりに何人も侍らせているはず——案の定、消費税10%先送りを決めました。それも「世界の経済はリーマンショック直前に似た状況にある」とか何とか、まるでサミットのお墨付でも得たようなふりをして。浜矩子さんのいう「アホノミクス」の失敗を覆い隠し、消費税増税の先送りへの国民の反応を選挙で問うと言っている。国民をバカにするのもほどほどにしてほしい。彼の唯一最大の関心は、この選挙で与党三分の二を獲得すること。国民よ、今度だけは、騙されてはいけない。消費税一〇%の撤廃どころか、たんに先送りを喜んで自民党に投票した結果、待っているのは元の本阿弥、第二次大戦以前の暗黒の軍国主義。七月一〇日の参院選は、戦後最も重大な選挙となる。これで日本の運命が決まる。

日本国憲法を維持し、平和主義を守るができるか否か——今私たちは断崖絶壁に立たされているのだ。私たちが彼に対抗するためには、

投票に行かない無党派層を、どうかしてこちら側に引きつけなければならぬ。そのために、全国のあらゆる女たちの市民グループをはじめ、水俣の被害者、脱原発、ふくしま、憲法改悪阻止のために組織された無数のグループが一致団結して、「野党に投票！」を国民にアピールすることはできないものだろうか。一流のグラフィックデザイナーを起用して、新聞に魅力的で効果的な意見広告を出すのもひとつの手だ。

個人的なことは政治的

一九六〇年代半ばにアメリカで始まった第二波女性解放運動の重要なスローガンのひとつに「The Political Is Personal, The Personal Is Political」（政治的なことは個人的、個人的なことは政治的）がある。アメリカでは妊娠中絶は、大統領選においても最も重大な争点のひとつだが、一九七三年にアメリカ最高裁は Roe vs Wade 訴訟において、憲法修正案第一四条によって女性は堕胎の権利が保障されているとする歴史的な判決を下した。しかし Rights to Life をはじめ、堕胎反対の強力

な男権的右翼組織によって、この女たちの権利はつねに危険にさらされている。たとえば現在、共和党の大統領候補の指名を勝ち取るうと「奮闘」しているトランプ氏は、あからさまな女性差別主義者で、「中絶をする女たちは、嚴重に罰されるべきだ」と公言している。中絶の問題のみならず、およそどんな個人的な問題も、それを真剣に解決しようとするなら政治に直面せざるを得ないだろう。今日日本で大きな問題となっている子育てや保育所の問題、介護の問題、DV、セクシャルハラスメント、ストーカー等々、すべてそう。もし政治に無関心を装う無数の無党派の有権者が、自分が抱えている「個人的な問題」は、実は政治的であることに気づいてくれさえすれば、私たちは一緒に戦うことができるのだ。

タクシーで、スーパーで、空港で

私はこれまで、ずいぶん多くの犬と散歩中の女たちや、スーパーの店員さん、宅急便の配達員、時折乗るタクシーの運転手さんや、羽田や千歳のJALのカウンターの職員や機上乗務員のみなさんに、ちようどよ

い会話のタイミングを見付けて、今回の選挙がなぜ重要なのかをかいつまんで説明し、「とにかく絶対に棄権しないでくださいね。これまでずっと自民党に投票してこられたとしても、今回だけは、野党に入れてください。与党に三分の二をとらせないために！」と言ってきた。半分以上の人は、「あら、アベさんって、そんなに恐ろしい人だったのですか。ちつとも知らなかった！わかりました」と、まっすぐにこちらの目を見て頷く。中には「でも、民主党（民進党）もねえ、何だか頼りにならないわね」と正直に自分の思いを述べる人も。そんな人に私はこう言う。「少々頼りにならなくても、戦争をはじめた人よりはましでしょう」（実際には、「木偶の坊でも、悪魔よりはいいでしょ?!」と言うのです）。

宅急便や水も扱う酒屋の配達員の若い男性には、「今度の選挙はゼツタイに棄権しちゃだめよ。もし与党が三分の二をとったら、あなたも徴兵されて戦場に送られるかもしれないのだから」すると彼らはみな、言葉は違っても「ええ、わかってます。いやですよ、殺しに行くなんて」

と答える。私はほっとする。

飛行機を降りる際、手荷物を前方で預かってくれたJALの機上職員に礼を言い、手にした新書、小林節・樋口陽一共著『憲法改正の真実』を見せながら、「とてもおもしろいのよ、この本」と私は言う。彼女はすぐにポケットからペンとメモ用紙を取り出し、タイトルを書き留める。「今度の選挙、与党以外に入れてくださいね。今の憲法さえあれば、日本は戦争をしなくてすむのです」彼女はにつこり笑って、「わかりました」。

願わくば、私が話した人たちが、さらに彼らの家族や友達に「今度の選挙は、小選挙区も比例区も、野党に投票しよう！」のスローガンを拡散してくれることを。あと選挙まで四〇日足らず。私はこれからもこれまでどおり淡々とたった一人の選挙運動を続けて行く。

「みんながスプーン一杯の砂糖を太平洋にそそぐなら、太平洋も甘くなる」。

四〇年前、グロリア・スタイナーが、はじめてのインタビューで私に言った言葉を信じて。

